

【エントリー名】 コロナ禍の芸術家を救え！ オンライン上のアートの可能性を拡げる「東京藝大アートフェス」の挑戦

【事業主体】

東京藝術大学

【カテゴリー】いずれか1つに✓を入れてください。

- マーケティング コーポレート ソーシャルグッド
- その他（システム開発、研究活動、執筆など①～③にあてはまらないもの）

案件概要： Describe the campaign/entry

- 新型コロナウイルスの感染拡大により、芸術家を取り巻く環境は大きく変化、日本ではアートに関わる各種の催しが不要不急とされ、美術館やコンサートホールは閉鎖、展覧会・音楽会も軒並み中止など約8割の芸術家が活動できず収入減に陥った。一方海外では、ドイツのモニカ・グリュッター文化相が「アーティストは今、生命維持に必要な不可欠な存在」と断言するなど、各国でスピーディな経済支援が行われた。
- **芸術の力による社会変革（アートイノベーション）を推進する、日本で唯一の国立総合芸術大学・東京藝術大学はその使命として行き詰まった芸術家たちを支援、その活動の場を確保しつつ窮状を発信することが急務と考え、オンライン上で作品を発表・評価する場として「東京藝大アートフェス」の開催を決定。**併せてアートに関心の薄い一般生活者層との繋がりを深め芸術家支援の機運を高めるため、インスタグラムを連携、情報拡散と「いいね」などアクションの仕組みも装備した。「**オンライン上でアート作品はその本質を伝えられるのか」「ソーシャルメディアでの評価（いいね数など）は適切なのか**」など芸術家側での賛否もあったが、その新たなチャレンジに各界アーティストや感度高いグローバルメディアも賛同しこれに協力、審査や情報発信に参画してくれた。
- 結果、参加アーティストはソーシャルメディアを通じて自身の作品をアピールする機会を得て、これを機会に世間の耳目を集めることに成功。**メディア出演やギャラリーでの展示会オファーを獲得するなど、アートフェスの賞金と共に経済的活動のリターンを得ることができた。**一方、アート業界としてもオンライン上での開催によって、美術や音楽といった異なる分野の芸術が融合する新たな領域を発見することになるなど新たな表現の可能性を知ることとなった。東京藝大では来年度も同様のオンラインアートフェスを開催する予定で、その他芸術大学などとの共催などによるさらなる活動の場の拡大提供を検討している。

解決すべき課題： Challenges

- コロナ禍、日本の行政が芸術への積極支援を見せない中、芸術家たちは発表の場を無くすなど経済的困窮に陥り、芸術家と社会や生活者を繋ぎその支援の機運をつくる必要があった。しかし学内の実技を伴う授業さえ制限される中、その窮状を伝え、また作品を発表する場を新たに作り出すことはできるのか。東京藝大は、通常では敬遠されるデジタルやオンラインを活用したアートフェスティバルの開催についてチャレンジすることとなった。

パブリックリレーションズとしての視点： Why PR?

- 通常のアートフェスでは広告による集客とリアルな展示という一方的なメッセージ発信が基本だが、本キャンペーンでは、オンライン上にアート鑑賞の場を設け、**インスタグラムと連携、作品の発表だけではなく、アートそのものについての参加者とアーティスト、参加者同士の議論の場とビジネスの機会を創造した。**

課題解決のための戦略： Strategy

- コロナ感染拡大による緊急事態宣言下に行ったアーティスト対象調査では、①80%以上の回答者が活動ができない、収入低下に困っている、②個人では約8割の回答者が金銭的補償を求めている、③約7割の回答者が短期的に生活・事業に対する金銭的支援を、長期的には活動再開に関する支援を求めている、などの困窮状況にあることを把握。
- 国が動かない中、東京藝術大学がこの窮状に積極的に関与する姿勢を示し、安心感を醸成することが重要と判断。まずは活躍の場を失った若手アーティストをフィーチャーすることで、それら若手をサポートしたいという世の中の機運を高めることを目指した。それら意見や議論を集約するプラットフォームとして「東京藝大アートフェス」をオンライン上に立ち上げ、卒業生である著名芸術家などを巻き込み世間の耳目を集めた。
- **アートに馴染みのない生活者も含めて、才能ある若手への支援に対する賛同の輪を繋ぎ、行政へのアピールへ繋げる作戦とした。**

課題解決のためのアイデア： Idea

- 社会から「能力者だから放っておいても大丈夫」と見過ごされがちな若手アーティストやアート界、その窮状への共感を生み出すべく、彼らの経済的困窮状況、またソーシャルメディア上で**必死に自身の作品アピールに取り組む姿を具体的に示して社会における支援意識醸成を目指した。**
- 絵画、音楽、彫刻など様々なジャンルを擁するアート界だが、通常その展示は全く異なる施設や環境で行われる。これを同じプラットフォームで見せるにはどうすれば良いか、そこでインスタグラムの「1投稿につき、画像を10枚、動画も30分まで」という特性を活用、**あらゆるジャンルの作品をフラットに展示した。**

活動内容： Execution

- ① 2021年3月～5月に渡り、オンライン上で「東京藝大アートフェス」開催。203人の若手アーティストから310点の作品が応募され、一次審査を通過した119点をオフィシャルサイトで展示。インスタグラムと連携したことで国内外からの反応も多く、アーティストと共感者/支援者との新たなネットワークづくりに寄与。**アーティストたちも自らのソーシャルメディアを駆使し積極的なプロモーションを行い、これまで受け身がちだったビジネス的な繋がりも増えていった。**
- ② 二次審査はインスタグラムの「いいね」数を参考に、隈研吾氏、コシノジュンコ氏、さだまさし氏など各界のオーソリティがボランティアで務め賞の価値を向上させた。5月2日の公開オンライン授賞式では、グランプリほか38点の受賞作品の発表が行われ、各アーティストに活動資金として賞金が授与された。
- ③ 活動経過はForbes JAPAN や WIRED、ELLE、GQ Japan などのメディアに取材要請し、各メディア視点から主催者や受賞作品、アーティストが採り上げられ報道された。**各メディアはその取り組みに共感し、その後もアートの意義や価値の拡張理解を促すための取材を続けてくれている。**

目標に対する直接的・間接的な成果： Results

- ① メディア露出は国内外で約700。複数のモバイルニュースでも掲載されソーシャルリーチ5億獲得、インスタグラムとの相性も活きる結果に。
- ② アートフェスに参加した若手アーティスト自身によるインスタグラムのアピールにより様々な接点づくりに成功。**東京・渋谷の新興ギャラリー「biscuit gallery」のオファーで展示会開催、作品の8割が売約決定、その後ギャラリー専属契約も決定するなど、個々のアーティストに経済的リターンも生まれている。**
- ③ **アートフェス終了直前には文化庁の都倉俊一長官が「文化芸術活動の休止は最終的な手段」「文化芸術活動は、不要不急ではなく生きていく上で、必要不可欠」とのメッセージを公開、さらに菅首相に対し文化芸術への国からの支援を早急に実施するよう要請するなど支援姿勢が表明された。**
- ④ 東京藝術大学では、今年度の活動成果を実感、次年度以降も活動の継続を決定。その他の芸術系教育機関とのコロナ拡大も視野に検討中。